歴史点描

岡藩史を読んで学ぶこと（四）

古藤田　太
（会員　弥生江良）

きびしい秀吉の命令によって「岡藩落ちにきまった中川秀成は、その時二十四才、生まれは元亀元年であった。（少し前から書き始めよう）

兄秀政の死を知った敵軍は二万の大軍をもって水源城を包囲したり、大兵を以て水源城を猛攻して追い立てようとするが秀成の陣頭指揮によってよく守備を完うしてきた。

当初はよく城から打って出る積極戦法であったが加藤清正の忠告に「兄秀政は恒に勇猛振りを発揮して敵軍を圧倒したが、このような軽挙妄動振りは今後おひかえなされ」と御指示されたという。秀成はこれより忠告に従われたという。

その後日本軍は朝鮮から総引揚となったことは御承知のことであろう。

文禄二年五月、三木城に帰還した秀成に対し秀吉から豊後国へ領地替えの内命が届いた。

その頃豊後では大友氏が改易され太閤蔵入地（秀吉の直轄地）となり、加賀国大聖寺城主山口玄蕃頭宗永と宮部桂俊に命じて豊後国の検知を行ったが、検地が終ると秀吉は同年十一月十九日附をもって朱印状と知行宛行状を出している。

翌文禄三年正月二十五日、秀成は三木城を引き払い総勢四千余人で播州坂越（さこし）の港から豊後国へ向かった。秀成には今回豊後国へ移動する莫大な経費は都合できなかったが、家臣柴山両賀重祐が支払い、藩主の立場を助けた。柴山両賀については後日語ることにしよう。

五十隻の大船には商人まで引き連れて四千余の大部隊の大移動ではあったが、二月八日速見郡小浦（日出町豊岡）に着き、陸路岡に向うに当たり、家老中川平右衛門長祐が先発隊長となり、十三日岡に入部するに当たり赤松付近で大友家残党四百人程が行く道を拒んだ。「道を開け」と命じたが聞き入れなかったので、中川軍は赤岩谷付近で浪人雑兵四百余名を攻め立て、雑兵八十余名を討ちとり十七名を生け取った。この大友の残党をこらしむ

るため、翌日八十余名の首をさらし、十七名を磔の刑とした。このきびしい処罰は領内にひそむ大友の残党をこらしむる見せしめとした。

中川秀成は無事岡城に入り、旧岡城主志賀親次の館を当分の居館とした。まず取りかかった工事は城下町を造ろうとすることであった。

資料紹介

忠成日史（五）

並河正明
（会員　佐伯市常盤西町）

【解　説】

豊日県境付近では相変わらず激戦が続いている。

八月十六日臨時裁判所の呼出があり薩兵に面会した三十二名の罪を免じた。

官軍人夫（守田組・後藤組・手島組）の出入りが多くなり本家楠羆三郎宅が人夫屯所となり、二六日大手前の千人小屋が大風で倒壊したため梶川家も官に借り受けられ、両家に各百人もの人夫が宿泊した。三十日には手島組人夫四千人が臼杵に繰り出したとあるので、佐伯は相当数の人夫でごった返していた様子が伺える。

延岡島ノ浦にいた楠羆三郎は宮崎県の臨時裁判を受け無事に佐伯へ帰ってきたが、大分県庁の呼出を受けた。